

# 平成22年度第12回定例会

## 八王子市教育委員会会議録

日	時	平成22年11月10日(水)	午前9時
場	所	教育センター	3階 第3研修室

## 第 1 2 回定例会議事日程

- 1 日 時 平成 2 2 年 1 1 月 1 0 日 ( 水 ) 午前 9 時
- 2 場 所 教育センター 3 階 第 3 研修室
- 3 会議に付すべき事件
  - 第 1 第 4 3 号議案 八王子市教育委員会事務局職員の懲戒処分等について
  - 第 2 第 4 4 号議案 平成 2 2 年度 1 1 月補正予算の調製依頼について
  - 第 3 第 4 5 号議案 平成 2 2 年度教育に関する事務の管理及び執行の状況の点検及び評価 ( 平成 2 1 年度分 ) について
- 4 報 告 事 項
  - ・教育シンポジウムの実施結果について ( 教育総務課 )
  - ・死亡者叙位・叙勲の受章について ( 指導課 )

### 八王子市教育委員会

#### 出席委員 ( 5 名 )

委 員 長	( 1 番 )	小田原 榮
委 員	( 2 番 )	和 田 孝
委 員	( 3 番 )	川 上 剋 美
委 員	( 4 番 )	水 崎 知 代
教 育 長	( 5 番 )	石 川 和 昭

#### 教育委員会事務局

教 育 長 ( 再 掲 )	石 川 和 昭
学 校 教 育 部 長	坂 倉 仁
学校教育部指導担当部長	佐 島 規
教 育 総 務 課 長	穴 井 由 美 子

学 校 教 育 部 主 幹	
（ 企 画 調 整 担 当 ）	平 塚 裕 之
施 設 整 備 課 長	萩生田 孝
学 事 課 長	海 野 千 細
学 校 教 育 部 主 幹	
（ 保 健 給 食 担 当 ）	山 野 井 寛 之
指 導 課 長	豊 田 学
指 導 課 統 括 指 導 主 事	
（ 教 育 施 策 担 当 ）	宮 崎 倉 太 郎
指 導 課 統 括 指 導 主 事	
（ 特 別 支 援 教 育 ・ 教 育 セ ン タ ー 担 当 ）	藏 重 佳 治
指 導 課 統 括 指 導 主 事	
（ 企 画 調 整 担 当 ）	所 夏 目
生 涯 学 習 ス ポ ー ツ 部 長	榎 本 茂 保
生 涯 学 習 ス ポ ー ツ 部 参 事	
（ 図 書 館 担 当 ）	望 月 正 人
生 涯 学 習 総 務 課 長	桑 原 次 夫
ス ポ ー ツ 振 興 課 長	遠 藤 辰 雄
生 涯 学 習 ス ポ ー ツ 部 主 幹	
（ ス ポ ー ツ 施 設 担 当 ）	遠 藤 幸 保
生 涯 学 習 ス ポ ー ツ 部 主 幹	
（ 国 民 体 育 大 会 開 催 準 備 担 当 ）	富 貴 澤 繁 幸
学 習 支 援 課 長	設 楽 い づ み
文 化 財 課 長	渡 辺 徳 康
生 涯 学 習 ス ポ ー ツ 部 主 幹	
（ 図 書 館 担 当 ）	中 村 照 雄
生 涯 学 習 ス ポ ー ツ 部 主 幹	
（ 図 書 館 担 当 ）	田 中 明 美
生 涯 学 習 ス ポ ー ツ 部 主 幹	
（ こ ど も 科 学 館 担 当 ）	齋 藤 和 仁

教育総務課主査  
指導課主査

後藤浩之  
古川洋一郎

事務局職員出席者

教育総務課主任  
教育総務課主任

久保陽子  
川村直

【午前9時00分開会】

小田原委員長 大変お待たせいたしました。本日の委員の出席は5名全員でございますので、本日の委員会は有効に成立いたしました。

これより平成22年度第12回定例会を開会いたします。

日程に入ります前に、本日の会議録署名委員の指名をいたします。

本日の会議録署名委員は、3番、川上剋美委員を指名いたします。よろしくお願います。

なお、議事日程中、第43号議案につきましては、審議内容が個人情報に及ぶため、第44号議案及び第45号議案については、いまだ意思形成過程のため、いずれも「地方教育行政の組織及び運営に関する法律」第13条第6項及び第7項の規定により、非公開といたしたいと思いますが、御異議ございませんか。

〔「異議なし」と呼ぶ者あり〕

小田原委員長 御異議ないものと認めます。

第43号議案は、前回廃案とした第41号議案の内容を改めて再提出したものでございます。

小田原委員長 それでは、それ以外の案件につきまして進行いたします。

今回は報告事項のみとなります。

まず、教育総務課から御報告願います。

穴井教育総務課長 それでは、11月6日に実施しました教育シンポジウムの実施結果について御報告をいたします。

詳細は担当の後藤主査から報告します。

後藤教育総務課主査 配布いたしました資料に沿いまして御報告のほうをさせていただきます。

教育シンポジウムの実施結果について、この取り組みにつきましては、開かれた教育委員会の取り組みの一環として、今年度については6月に引き続き2回目というようなことで実施をさせていただきました。

開催の日時でございますけれども、11月6日土曜日、生涯学習センター（クリエイトホール）の5階ホールで開催をいたしました。

今回は、「地域の教育力」を活かして～みんなで育てよう八王子の子ども～という

テーマで、子どもたちの学習習慣、生活習慣の確立に向けて、地域全体で実践できる方策を考えていこうということで実施をさせていただきました。

内容につきましては、第1部としまして基調講演、第2部としてパネルディスカッションを行っております。基調講演の講師につきましては、NPO法人八王子子ども劇場代表理事の浅野里恵子さんをお招きしております。

パネルディスカッションにつきましては、八王子子どもの居場所づくりプロジェクト「タマリバ」代表の炭谷晃男さん、市立第六中学校の保護者である後藤貴弓さん、そのほか教育委員の皆さんを含め、パネリスト7名、コーディネーターを浅野里恵子さんをお願いいたしまして、意見交換をしたものでございます。

当日の入場者数でございますけれども、定員170名のところ入場者が176名と、定員を超える入場をしていただきました。超えた部分につきましては、いすを出させていいただいて、そこに掛けていただきました。

昨年度同時期に行った意見交換会につきましては130名、今年度の6月に行った、同じく意見交換会については143名の参加者がありまして、今回のシンポジウムはそれをまた超える176名というような参加者をお迎えすることができました。

当日、アンケートを実施させていただきまして、回収をさせていただいた方が、入場者数のその下に挙げさせていただいておりますけれども、114名の方からアンケートのほうを回収させていただいております。

その内訳でございますけれども、保護者、小学校、中学校の保護者が28名、校長、これも小学校、中学校含めてですけれども31名、副校長11名、教職員の方が6名、その他学校運営協議会委員の方であるとか、学校の各種ボランティアの方など38名と、アンケートの未回収の分が62名でございます。

そして、これまで学校関係者、校長、副校長の参加数が少なかったことがございますけれども、今回につきましては、校長、副校長、教職員を含めまして48名の方に参加していただいて、アンケートを回収させていただいていました。アンケートの回収率から言いますと、42%の方が学校の校長、副校長、学校の関係者に参加していただいたということでございます。

資料の6番のほうに挙げさせていただいておりますけれども、そのアンケートの中で意見・感想を自由記載していただくところがございました。その主だったものを挙げさせていただいております。

主な感想としましては、地域の現状や、そこから見えてくる家庭の姿がよく理解できた。ボランティアに参加する学生が多くいることがわかり、今後に期待できた。あとは、いろいろな立場の話が聞けて参考になったなど、貴重な御意見をいただいております。

そのほか、個々の意見には納得できたが、全体としてはちょっとまとまりに欠けたのではないかと感じている。意見交換というよりは意見発表になってしまっていた感がある。テーマを絞って深いディスカッションをしてほしかったなど、残念な御意見のほうもいただいているところがございます。

今後も引き続き、この開かれた教育委員会の取り組みは継続して実施しておりますので、これらの意見を踏まえて、今後もよりよい形にしていきたいと思っております。私からの報告は以上でございます。

小田原委員長 教育総務課からの報告は終わりました。

本件につきまして、何か御質疑、御意見はございませんか。

冒頭に申し上げるべきだったんですけども、この間、皆さん、本当にお疲れさまでした。土曜日にもかかわらずたくさんの方に参加していただいて、本当にここで言われているように、いろいろな姿が見えたということはよろしかったと思うんですが、何か御意見ございませんか。

水崎委員 ちょっと教えていただきたいんですけども、入場者数が176名だったとなっておりますね。そしてアンケート回収が114名で、未回収が62名。参加した方から連絡があって、アンケートを出すことで参加者の人数のカウントをしているみたいだということを聞いたんですけども、ちょっとこのカウントの仕方というのは、どのようなカウントをしているんでしょうか。

穴井教育総務課長 最初に入られたときに資料をお渡しし、アンケートに番号が入っていますので、アンケート未回収62と書いてありますが、アンケートの回収した人数だけではないです。要は、入ってきた方には全部渡していますので、その枚数でカウントしているということです。

水崎委員 書類を渡したので何人入ったって把握しているわけですね。

穴井教育総務課長 はい。

水崎委員 そして、その他が38名、それでアンケート未回収62名ですね。このその他はいろんな役の方なんですか、どうなんですか。あと未回収が62名、この未回

収の中に保護者、校長、副校長、教職員、その他、そういう方も入っているということになるんですかね。この分類は全部できなかったということなんですかしら。

後藤教育総務課主査　その他の部分につきましては、学校運営協議会委員の方であるとか、育成指導員、あと学生の方、その他主任児童委員とか、いろいろな方が入ってございます。そして未回収の部分、この62件の中には、ちょっと把握はできませんので、もちろん保護者の方であるとか、校長、副校長、その他いろいろな方が入っているものと思っております。

小田原委員長　そのほかありますか。

和田委員　率直な感想ということでお話をさせていただければ、やはりもうちょっと事前にこのテーマの絞り込みを教育委員そのものもしておくべきだったなというふうに思っています。私も意見表明というか、述べるに当たって、このテーマと主題を何度も繰り返し読んでいたんですけども、結局このシンポジウムで求めているものは一体何なのかということがなかなか最後までつかめずにおりました。

そして、このテーマの中で「地域の教育力」を活かして」という表現になっているので、しかも、その後半が「みんなで育てよう八王子の子ども」ということになっているので、これを続けて読めば、「地域の教育力」を活かして八王子の子どもたちを育てていこう」という、そういう文脈になるわけなんですけれども。説明文を読むと、学習指導であるとか、生活指導なんかにそういう地域の力を活かさないかという表現にもなっているのです。

要するに、このシンポジウムのテーマを考えてみたときに、発表者、コーディネーターの方も含めての内容を考えると、一つは、地域のそういう子育てを行っているお母さんとかお父さんたちの、そういうつながりを支援をしていく、そういう活動を随分取り上げていましたよね。地域のそういう取り組みをされている方の支援やその取り組みを、教育委員会としても学校の力をかりながら広めていこうとか、そういうような発想が一つあるのかなというのと、もう一つは、その地域の方の集まりだとかつながりを学校教育に生かしていく部分があるんだろうなという、そういう2面を強く感じたんですね。

ですから、私自身の意見も柱立てとしては、まず自分も地域の一人ですよと、そういう取り組みを非常に地域の人たちの活動を見ていて、私も将来そういう形になって取り組んでいきたい、そういう市民の意識が大事なんだよという発想をまずお話しし

たかった。

それから、そういう中で、私も大学の教員なので、地域の力の中には大学生もいるんだよと、それと、そういう人たちが学校の教育に一生懸命取り組んでいこうというのを若いときからやっているんだよっていう、そういう地域の教育力の一つに若い学生たちの力もそれにかかわっているんだよっていう、そういうことをメッセージとして送りたいかなって思いました。それは地域の活動の支援をしていく、あるいはその素地としての学生や若者を育成をしていきたいということをや前半に思いました。

後半のほうはちょっと時間がなかったんで、学校の先生方が地域に期待している部分も多いし、学校や教育行政の中でも、地域の力をかりない、あるいは保護者の力をかりないようなもう教育というのはあり得ないんだよってことを述べるために、いろんな校長先生からの意見を求めたらどうですかっていう発想をしたんですね。そうすると、大きく違う柱を2つ述べることになったんですよ。

果たして教育委員会が地域の子育てで、まさに浅野さんなんかは、0123、つまり0歳から3歳までの子どもたちを育てている母親の支援をしていこうという団体のアピールをしていましたよね。そういうようなことになってきたときに、それにどういふふう意見が言ったらいいのかというのは非常に悩みましたし、教育委員会はそれじゃどういふ支援を担っていくのかということ、むしろ福祉的な面が出てきたりする、あるいはNPOで取り組んでいるとすれば、それを教育委員会がどうだこうだという立場にあるのかっていうようなジレンマもあったんですね。いろんな考え方があって行っているわけですから。

ですから、そういう意味で、地域の活動を支援するということを教育委員会のこいうシンポジウムでテーマとして取り上げるのはどうかなっていふふう、テーマの柱にちょっとぐらつきが出てきてしまったんですね。

それから、後半のほうで、やっぱり地域の活力を学校に生かしたりとか、あるいは学校の教育力を地域に生かすということを考えてときに、やはり学校の先生方が地域に入ってほしいというふうに思いますし、あるいは地域でやっていることを取り入れてもらいたいと思うんだけど、果たしてそれについて今まで教育委員会がやってきた地域の人材活用であるとか、教材を生かしてとかということが、それを支援するよね、そういうような話し合いに深められなかったというのは、ちょっと後半のほうとしては残念だったなと思っているんですね。

ですから、ちょっと柱が随分大きな柱が出てきちゃって、それについて絞り切れなかった。途中で委員長が調整を図っていて、つながりを大事にしたりとか、地域の教育力を集約するような、そういう方向の話し合いをしたらどうかという御発言があったんですけども、なかなかそれについて教育委員だとか会場に来ている、これを見ると学校の先生方は多いわけですけど、学校の先生方が地域のそういう活動に対してどういう発言ができるのかなとか、意見を持つのかなというのは、なかなか難しいテーマだったんじゃないかなっていうふうな率直な意見なんですね。ちょっと感想として、もう少しテーマを絞って進めていくという部分と、教育委員会の話し合いの範疇というのはどこにあるのかというのをもうちょっと事前に打ち合わせしておきたかったなと思います。内容として、テーマとして悪かったんじゃないくて、どこに焦点を持っていった話し合いを進めていくべきだったのかというのは、ちょっと私自身の参加するに当たっての絞り込みが足りなかった部分でもあるというふうに思っています。

小田原委員長　　ということですが、いかがですか。和田委員のお話は、そのとおりなんですよ。僕はね、あれだけの人数が集まった中で、会場に来た皆さんもそうだけれども、壇上もいっぱい多過ぎたんですよ。あの形でやったっていいんだけども、シンポジウムとかパネルディスカッションになれていない人たちが多過ぎたという印象があるんですね。自分の意見発表じゃなくて、実践報告が主になった。初めの部分はそれでいいんですけども、その最後に和田委員がこういう話を聞きたいんだという、そういう投げかけがあったんだけども、そういうのを全く無視して進行していっちゃって、ほかに振っちゃったものだから何言ってもいいかわからなくなっちゃって、間を持たせないということでもって、ほかの委員に振っちゃった。だから、全員がしゃべらなきゃならなくなった。そしたら、話はどこに持っていくかというのは收拾つかなくなっちゃったということだろうと思うんですけども。それは打ち合わせしても多分そうだったんじゃないかというふうに思います。そしたら、僕が軌道修正したつもりなんだけれども、そのようには進まなかった。

だから、あれはあれでまた皆さん、それぞれ言っていた部分でよかったと思いますけれども、例えば、川上先生の話なんていうのは、非常に含蓄深い言葉で言っちゃったものだから、理解してくれた方は半分いたかどうかというふうに私は聞いてただけでもね、非常に鋭いことを言ってたんだけども、理解されなかったんじゃないかなという感じがしますね。

川上委員　　どういうふうに思われたか、ちょっとわかりませんが、教育っていうもののもとが、教育委員会だろうと学校だろうと地域だろうと、みんな個人がつくり上げている個人があって、そこにいるのは個人なわけで、個人一人一人の力とか、個人一人一人の意識というものが一番大事なんじゃないかというところで私はお話をさせてもらったつもりだったんですね。

それから、いろいろな組織が余りにも多過ぎて、それが有効的かというと、有機的に連携してないみたいな、その組織があるからできるんだみたいな、組織をつくるとできるんだみたいなっていうのが一番弱いあり方なんではないかというふうに私は考えていたので、ちょっと違う方向だったかもしれませんが。みんなが、私は地域という言葉もよくわかりませんでしたし、あそこでも申し上げたし。ですけれど、それこそ日本、いつも日本の宝だと、子どもたちをそういうふうに思っているということのみんなの意識がまずそこないと、どんなものを組織しても、その意義が本当に全うできないのではないかなとか、揺らいでしまうのではないかという感想をいつも思っているもんですから、ああいうふうな話をさせていただいた。

小田原委員長　　地域っていうのは何かという話を深めるいいきっかけがあったわけですよ。だから、そのNPOはNPOで構わないんだけど、そういう活動をしている人たちが、さっきの和田さんの話のように、どう学校に返っていくというか、生かされていくのかというときに、地域っていうのは、川上さんの提起したのは非常に大きいわけで、日本から世界、地球という地域という中でどう考えていくか、今できることは何かと言ったら、個々の大人から始まっていくだろうという話にもなっていくし、もっと言えば、大人も子どもも含めた一人一人の人間としてどういうふうに世の中に生きていくのかということをお話することになるだろうと思うんですけどね。そういう話に持っていけなかったのは残念だけれども、それぞれの立場で言いたいことがちょっとは言えた。いかがですか。

水崎委員　　子どもを見るときに、子どもって教育の面と、福祉だとか、いろんな面で総合的に見なくちゃいけないと思いますよね。そして、今回のこのテーマですけど、実は9月にお話を出されたときに、家庭教育支援の方策について探るというふうなことも出てたと思ったので、地域の力を学校にという話もちろんいいのかもしれないですけども、私はその地域の教育力を生かして家庭教育の支援だとか、そういったほうの方策だとか、取り組みだとか、そういう話のほうに行くのかなって理解しちゃって

たんですね。そして、一応事前に自分の考えをまとめるときに、どうしても私はその9月に最初いただいたときの話が頭に残っていたため、家庭の教育という話をまとめていたもんで、ちょっと違ったのかなって、地域の教育力を学校にだとか子どもにということで、家庭教育については余り触れる場ではなかったのかなと思って、ちょっとそこで自分の感覚が違ってたなって思ったんですけど、あえてあの場は家庭教育は踏み込まないというふうな話になってたんでしょうか、そういうことではなくて、流れでそうなったということなんですか。

穴井教育総務課長 今回のテーマは、かなり難しいテーマで、ただ、教育委員会としては、家庭教育、地域教育力の向上というのは図っていかなければいけない中で、それぞれの、多分、でも保護者っていうか、皆さん同じような感覚を持ってて、何とかしなきゃいけないという思いはある中で、水崎委員が言ったように、地域の教育力というのは、家庭を育てる力でもあって、早寝・早起きを初めとする生活習慣をつけるだとか、そういう家庭教育に地域がどうかかわっていくのかという話に、私としては展開するんだというふうに思っていたんですが、ちょっと違う方向に行ってしまったというのがあると思います。

和田委員 私はね、このシンポジウムをやるに当たって、八王子市が「ゆめおり教育プラン」を作成していると。シンポジウムそのものの意味としては、やっぱり八王子の教育委員会が行っているいろんな施策の理解と、それに対する意見を求める場でもあるというふうに考えていたんですね。それを考えると、このゆめおり教育プランの中で第5章のところに、学校、家庭、地域の協働により社会全体の教育力を高めるという内容を示してあるわけなんで、これに沿ったいろんな意見や内容がそのシンポジウムを通してなされればいいなという思いもあったんですね。

ですから、そういう意味からすると、その第5章の中の中身もやっぱり分かれていて、いろんな角度から示されている。今の話のように、それぞれの立場を考えていくと、ここに書かれている内容も非常に多岐にわたっていて、地域運営学校から始まって、放課後子ども教室の実施とか、家庭教育との連携とかっていう、そういう項目も入っているのでね、非常にやっぱり広い部分を取り上げていたので、この部分についての意見を求めるにしても、まだ広い視点になってしまって、絞り込みができなかったなというふうに思っています。最終的には、私これを売りにしようと思っていたんです、最後のまとめのところで、そこまでたどり着けなかったんで、八王子の教育委員会

はこういう取り組みをやっているんですよということをアピールしながら意見を求められればいいなと思っていたんだけど、そこまでたどり着かなかったので、ちょっと最初からもうちょっとここにねらいを定めとけばよかったのかなという気は今でもしていますね。

石川教育長　今いろんなことが言われててね、特に学力低下の問題、これはもちろん学校だけじゃなくて、家庭の問題も非常に大きいわけだけれども。でも、学力低下、それから、これは学校の教育力の低下ですよ、それから家庭の教育力の低下、それから地域の教育力の低下、これいろんなところで出てきてて、そういう実態があるからこそ、私の頭の中では地域の教育力は潜在的なものがすごくたくさんあると思うんですよ、地域性にもよるけれども。でも、私が発言の中で非常に脆弱なところもあると、こういうふうに言ったわけですけども。

ですから、その教育力のあるところの実態を広くみんなで共有して、ないところの教育力を高めるにはどうしたらいいかという、そういう方向性が出てきたらいいなというふうに思っていたんです。私も事務局の責任者として非常に責任を感じている部分なんですけれども、やっぱり講師は大変立派な方だけれども、やっぱりこのテーマの中でテーマに沿った形での基調講演でなかったような気がするんですよ。それはもう最初のレジュメのところでは皆さん、おわかりだと思いますけれども。そういう意味で、やっぱりこれ事務局の責任もあるなというふうに感じています。

それから、これ委員長もさっきおっしゃいましたけれども、余りにもやっぱり多い人が多くの発言をするから散漫になるわけだね、こんなことはもう前から言われてて、私も指摘したんだけど、これ改善しないままここへ突入しちゃったんですよ。だから、そういうのをやっぱり次に生かしていかないとね、やっぱりせいぜい4人だと思いますよ。こんなに大勢にしゃべらせたら散漫になるのは当たり前で、これはぜひ改善をしていかなきゃいけないというふうに思っています。

幾つかいい意見も出たんで、できるだけ今度は絞った形で、どうやったら集中的に議論が深められるか。そして、その議論が現場、特に家庭や地域や学校に生かされていくのか、そういうことにしないと意味がないと思いますので。

それから、学校関係者はかなり来ていますけれども、私は学校関係者はもちろん大事だけれども、地域の人たちにこういうことを聞いてもらいたい、それでないと意味がないと思うんですよ。

だから、組織された団体の関係者を動員するということはもちろん必要なだけけれども、でも、それ以上に一般市民への働きかけをどうやったらいいのか、その辺のところも今後事務局は考えていかなきゃいけないのかなと、そんなふうに思っています。

穴井教育総務課長　事務局としても大変反省をしているところですので、来年度実施する際には、委員の皆様から御意見をいただいたように、もっと事前にテーマの絞り込みと進め方の調整、そのところをしっかりとやっていきたいと思っていますので、よろしくをお願いします。

小田原委員長　主な感想・意見の下の4つの部分をどう取り上げて、それをどういう形にしていくかということですよ。これは特にどうですか、何かありますか。はい、どうぞ。いや、何か具体的にさらにあれば。

水崎委員　周知徹底するときに、町自連　町会自治会の連合会の町自連のほうにお誘いの配布、こういうお知らせの配布とか、そういうことは今回されたんですか。

後藤教育総務課主査　今回はしていません。

水崎委員　例えば、地域の話なんかのときは、私は町自連のほうなんかにも、ぜひこういうことをやりますよという働きかけをすれば、地域でも少しずつでも意識を高く持っていく方向になるのかなって思ったので、ちょっとそういうこともまた検討してもらえればいなと思ったのが1つと。

あと人数が、教育委員が全部出ると5人なんですよね。5人が多いのを絞ろうと思ったときに、その絞り方について、事前に時間かけてちょっと検討しながらやったほうがいいのかな。多分代表で出る方は教育委員をしょって出るもんで、なかなか自分の個人的な、例えば、私が一人で出たとしたときに、私は保護者枠の立場で入っているので、自分の感想はありますよね。それを教育委員会委員として出るときに、教育委員会の考えも加味しながら言わなくちゃいけない、自分の考えも言いたい、そこら辺が結構複雑なものがあるかなという気もしたので、もちろんテーマにもよるとは思うんですけどもね、人選するときには、またいろいろ御検討のほう一緒に考えさせてもらえればなと思いますので、よろしくをお願いします。

穴井教育総務課長　私もすごく迷うところですが、教育委員を市民の立場からいうと、5人、教育委員がいるわけですから、それぞれからお話を聞きたいという面もあると思うんですね。シンポジウムとして成功させるとすると、やっぱり人数が多いというところがあって、そこがすごく悩むところですので、来年度もしも、今のところ事務

局として考えているのは、壇上には5人の方がいらっしやったとしても、もう少し全体に意見を回せるような、要は集中的に聞かせるようなコーディネーターができる方、そういう方をちょっと御用意するのが一つの方策でもあるのかなというふうに考えています。

また、来年度については御相談をさせていただいて、委員5人ではなくて、選抜をするということであれば、またそれはそれなりに調整していきたいというふうに思っています。

小田原委員長 そのほかいかがですか。教育委員なのか個人なのかという話で水崎さんは悩むということだったんだけど、これは例えば内閣総理大臣が公人なのか私人なのかということと同じで、水崎さんが教育委員であれば、個人であっても教育委員、公人的に何か言ったら、教育委員の水崎さんが言ってるということになるわけですから、それはそういうふうに意識していただきたいというふうに思いますね。

水崎委員 意識はしています。委員で出ているのはわかるんです。ただ、教育委員会をしょってるってなったときには負担だなという、それを言っただけで、正直言って、私を選んでもらわなければいいことなんで、大丈夫です。

小田原委員長 しょってる、しょってるんじゃないから、それはそれでそういうことで構わないんです。

以前、大田原市に行く機会があって、そこで例えば35人学級の話が出て、30人学級の話が出て、実際はやってはいるんだけど、正式な形で取り上げているわけじゃないんだけど、僕は個人的には、そんな人数じゃないよという話を勝手にしちゃったんですけども、かなり意識して言っていました。

その話も含めて、あそこで幾つかの話が出ましたね。そういうことについては、どう考えるかというのも考えていかなきゃいけない。例えば、NPOなり団体が動いているのをどう学校に生かしていくかということと、家庭の、水崎さんが言ってる家庭をどうするか、地域や家庭をどうするかということもある。これは教育で考える話かどうかというのは別にしてありますよね。それから、個々の一人一人に対して働きかけていく、これは時間のかかることだけれども、そういう人間形成が大事なんだよと、大人も子どもも含めてという指摘があったでしょう。それで、和田さんは和田さんなりにいろんな角度から投げかけているわけですから、それをじゃ具体的にどうするかというのは、施策として考えていく。それをぜひ打ち出してほしい。こういうのをき

っかけにして、こういうことを考えます。

さらに、地域の教育力とは別な話が幾つか出てましたよね。市民というか、何というか、よくわからない、よくわからない話じゃいけないけれども。僕が前に言った、学校予算が半分に減らされたって話はこの間も出てましたね、別な形で。あんなことが実際にほかにもあるということですよね。

それから、生活保護の家庭以外の子どもで塾に行けない子どもたちの面倒を見てくれないかとかいう話もあったでしょう。そんなことはどういうふうに考えるかということですね。そうして取り上げられるのかどうか、ぜひ考えることの多かった意見交換会だったと思います。

ということで今回のこの件について、よろしいですか。

それでは、教育総務課の報告は以上ということで、指導課から続いて御報告願います。

豊田指導課長　それでは、指導課のほうから死亡者叙位と叙勲の受賞について御報告をさせていただきます。

受賞者につきましては、元八王子市立元八中学校長松本利雄さん、享年82歳。平成22年6月22日にお亡くなりになりました。

経歴としては、教育公務員歴40年11カ月、校長歴3年で、昭和60年4月から八王子市立元八中学校長として3年間御活躍をいただきました。

受賞の内容については、正六位、叙勲については瑞宝双光章という章を受賞されたということで御報告を申し上げます。

内容は以上です。

小田原委員長　指導課からの報告ですが、何か御質問、御意見ございませんか。

〔「なし」と呼ぶ者あり〕

小田原委員長　特にないようでございますので、指導課の報告は以上ということでございます。

そのほかに何か報告事項はございますか。

坂倉学校教育部長　事前に資料を御配布しないで申しわけありませんでした。ここで八王子市特別支援教育ハンドブックというものを調製いたしましたので、特別支援担当の統括指導主事のほうから、ねらいとこの概要について御報告させていただければ幸いですけど。

小田原委員長　　じゃ指導課、続いてどうぞ。

藏重指導課統括指導主事　　事前に資料を配布しないで申しわけございませんでした。このたび教育センターの特別支援教育担当のほうから八王子市特別支援教育ハンドブックを作成いたしましたので、ここで報告させていただくとともに、どういう流れで今後配布していくかについて御説明させていただきたいと思います。

小中学校の先生方へ特別支援教育に対する理解をさらに周知することを目的といたしまして、このハンドブックを作成させていただきました。めくっていただければ目次にもございますように、特別支援教育への考え方、それから障害に対すること、そして、その障害のあるお子さんを日々学校で抱える学校の先生たちが、今後どのような形で相談窓口として行っていけばいいかという、センターの機能についても書かれております。

こういう本を1冊教員が持つことによりまして、学校にいる特別な支援の必要なお子さんへの対応を円滑に行っていただければと思っております。各学校には12月中をめどに、全校の教職員向けに配布させていただきたいと思っております。また、ホームページを通じて広く市民にも周知が図られるようにやっております。

報告は以上でございます。

小田原委員長　　指導課からの説明は終わりました。

本件につきまして、何か御質問、御意見ございませんか。

水崎委員　　以前、地域セミナーのときに、ぜひセミナーに参加した方がわかるような資料をつけてもらったらいいんじゃないかという話をしたんですけども、地域セミナーを開催するときもこれを会場の方に配って利用するなんていうことはあるんでしょうか。また、資料は別になりますか。

藏重指導課統括指導主事　　一冊のこのものをすべてどの会場にも配布するということは、今のところは考えておりませんが、その中の抜粋であったりとか、そういう形でわかりやすい、そのセミナーに合った内容のところを取り出して配布することは考えております。

水崎委員　　一般市民がこれを欲しいと言ったときにはいただけるんですか、ホームページからプリントアウトして自分で見なくちゃいけないんですか、結構なこれ枚数なんですよね。一般市民にも希望者には配布はされるんでしょうか。部数の関係でどうなんでしょうか。

藏重指導課統括指導主事 現在のところは教員1人に1冊という形で、学校の中で校内委員会等で活用いただくという形を目的としております。

ただ、その活用も含めて、またホームページに載せておりますので、市民の声等もかんがみながら、市民への配布については考えていきたいと思っております。

水崎委員 ちょっとしつこくなっちゃうかもしれないんですけど、「おわりに」のところ、一般の方の感じている率直な疑問など教えていただき、一般の皆さんや学校の先生方にそういう仕組みを理解していただくことを目的につくられたってなっていますので、予算等がどのくらいかかるのか、私はわかりませんが、希望者がいたらぜひ一般の市民とか保護者とか、そういった方にも希望者には配布していただいて、みんなで一緒に考えようという、そういう方向に行けばいいかなと思っておりますので、ぜひまたいい方向でどんどん広げていただけるようお願いしたいと、私は思います。

和田委員 これは学校の先生向けの特別支援教育ハンドブックということではよろしいんですか。

藏重指導課統括指導主事 この本を作成するに当たっては、地域セミナー、先ほどございましたように、地域セミナーに参加する特別支援に関心の高い保護者の方、具体的には、さくらんぼの会とか、かたつむりの会の代表者なんですが、そういった実際に御自分でも障害のあるお母さんの御意見も、それから島田療育センター等の医療機関等も、いろんなところからの御意見を参考にしながらつくっております。そういう意味では、保護者の立場から見た内容というか、言い回しも当然ございますので、一概に学校の教員へ向けというわけではなくて、そういう意味では広く市民の方々にも見ていただきたいという内容ではつくっております。

今のところ配布については、先ほど言いましたように、教員にはまず学校の中で活用していく中で、このハンドブックの反響を見ていきたいというのがございますし、今、水崎委員からもございましたように、それは広く市民のほうにも伝えるすべもこれから検討していきたいと思っております。

和田委員 この書き出しから、この流れから考えたときに、特別支援教育を障害のあるお子さんを対象とする教育だということを前提に書かれているハンドブックだと思うんですね。学校については、本来は特別支援教育というのは、クラスの、あるいは学校の中に障害のある子もない子もすべてにかかわる教育支援であるという考え方を国は打ち出していますよね。そのときに、これは先生方にこれだけを配ると、結局障害

のあるお子さんを対象としている特別支援教育なんだという、そういう受けとめ方をされて、障害の有無について、あるいはチェックをするような内容が出てきているのでね、こういう子がいないか、こういう子がいないかっていう、それじゃ特別支援教育だという、そういう発想になりがちな部分があるので、これ以外にやっぱり特別支援教育の本来のあり方については別のところで御指導をされているんだろかなっていうふうに思っているんですね。つまり、クラスの中で子どもたち、いろんな子どもたちを受け入れているわけですよね。受け入れていることに対してどう支援するかということが特別支援教育の根底にあると思うんですよね。

ですから、これで言うと、過去における養護学校であるとか、それから学級のそういう障害のあるお子さんたちの学級に対する指導のような印象を受けかねないので、その部分だけでは資料を学校に配布するに当たっては、大きな意味での特別支援教育の説明であるとか、そういうものをしてからこういう資料をお配りいただけるといいんじゃないかなというふうに思っています。最初からもう発達障害ということを取り上げて、まずここから入っているので、これがそういう対象者を前提としたハンドブックであるということであれば、それはそれでいいのかなというふうに思うんですけども、これがこれですべてではないというふうに思っていますので。その辺のところ、ほかの先生方にこの特別支援教育のあり方みたいなものを研修会等で、また少し広い範囲での研修や指導もされているんですよね。

藏重指導課統括指導主事 年4回のコーディネーター研修を含めて、学校への研修はセンターのほうでさせていただいております。

小田原委員長 それは、一般の、普通の学級の先生を対象にしているんじゃなくて、特別支援学級の教員を対象にしたのが年4回ということなんですか。

藏重指導課統括指導主事 いえ、通常級の学校に設置しております特別支援教育コーディネーターでございますので、それは通常学級の。

小田原委員長 学校コーディネーターを対象の4回の研修ということね。

藏重指導課統括指導主事 はい、そうです。

小田原委員長 和田先生が言ってるのは、そうじゃない一般の担任に対して聞いてるわけだから、どうなのかと。これもそういうふうな形でもってなかってなかった、そうじゃないように見えるわけ、そこを聞いてるんだけど、どうですか。

藏重指導課統括指導主事 現在の研修では、コーディネーターを通じて先生方に広めて

いただくという形でやっておりまして、一般の先生方を対象の研修は今のところはございません。

ただ、今広がりの中であるのは、通常学級の中でやはり支援が必要なお子さんがいらっしゃる、その支援の仕方の方の方法のスキルとして、特別支援学校のコーディネーターが巡回指導しながら、どのような方法の手だてを打てばいいかというふうな出前授業をやったりとか、そういった復籍の交流の中で広めていくというのが徐々に広がりつつありますので、そういうことも含めて、市として支援していきたいと思っています。

小田原委員長　このハンドブックは、結局、従来の特殊教育あるいは心身障害教育を受けて、さらにもっと広げている部分があるわけだけれど、これを見ると、そういう子どもたちを法律なり何とかによって取り分けて、そういう子どもたちについてはどういふふうにしましょうかという、そういうスキルを何とか述べている本になっちゃっているんじゃないかと。そうじゃなくて、特別支援教育とは言っているけれども、すべての子どもたちを支援する、それが基本であって、その中でどうするかということをもっとすべきだというのが和田さんの意見なんですよ。それについてはどうなのかって聞いているわけだから、どうなんですか。研修はやってますという話で終わっちゃうのか。

佐島学校教育部指導担当部長　この冊子の概要については、学校の教員にとっても、あるいは市民の方にとってもいろいろ参考になる内容だと思うんです。ただ、これをぼんぼん配るだけでは、当然のことながら、活用されないし、この冊子が目指している子どもたちへの対応、そして今の流れであるすべての子どもたちに対する優しい貢献というような意味では、十分な効果を上げるのは難しいと思いますので、この配布をするのにあわせて、研修であるとか、通知であるとか、当然校長会のほうでも話を差し上げることになると思いますけれども、学校に対する意識づけというのを十分行った上で配布をして、効果を上げるように考えていきたいと思います。また、先ほど、市民の方への配布というような部分がありましたけれども、学校の取り組みについてももちろん知っていただくことも大切なんですけれども、保護者の方々のニーズとして、どういう相談窓口なのか、どういう教育の受け皿があるのかというようなことについて、詳しく知りたいというようなニーズもあるかと思しますので、そういう部分を徐々に打ち出して、パンフレット形式にして配られる形にするとか、その辺のところ

も検討していくように。

小田原委員長　　どうですか。よろしいですか。難しい、教育委員会としての姿勢を示しちゃう形になりそうな心配がするんですね、これはね。だから、そういうところは心配すべきなのか、いや、そういう方向で進むのかということなんで、これはどっちかという、これを出すことによって、あれかこれかというふうに分けていく、そういうふうになっていくんじゃないか、それでもいいのかということだと思いますね。だから、今担当部長からお話ありましたけれども、そのほかさまざまな研修を通じて、それぞれ一人一人に対する支援の中で特別支援というのはどうあるべきかみたいなことを広めていくんだということで、具体化を見守る、見ていくということになるということになりますか。

海野学事課長　　前任者の立場でちょっと補足させていただきたいと思うんですが、和田委員の御指摘、非常に大事なことで、通常学級の先生方が、やはり障害という名前がつくっていうと、自分が担当じゃないってというような受けとめ方をされるということは体験してたところなんでね、この冊子の例えば4ページを見ていただきますというと、一番上のパラグラフの一番下の段落で、「また」という部分があるんですけども、子ども一人一人の教育的ニーズに応じた支援について、特別支援教育の理念は、障害のある子に限らず、すべての児童生徒の指導に通じるものですというふうな言葉を入れているのも、その辺の趣旨を理解したいということなのかなと。

それから、6ページの上のところ、大切なことがわかってきましたというところで、国のような基本的な理解が重要ですよというあたりも、基本的には障害があるなしにかかわらず、こういう視点を持って、子どもたちと対応していくことが必要だということをお伝えたいとは思って、構成しました。ただ、現実には、発達障害についての理解というのは、まだまだ十分でないところがありますので、構成全体としては、障害にかかわるといような構成になっていますけれども、今後、そういう基本的な理念の理解については、今後も教員への理解、それから一般の保護者、地域の方とも共通理解を図っていくような対応を進めていきたいというふうに考えています。

小田原委員長　　はい。その部分が目立たなくて、すぐ発達障害法にいつちゃうから、これはいかがかなということをお心配してたわけですよ。でき上がった本ですから、もうしょうがないんだけど、みんな、もう配っちゃってる部分もありますからね。そこを今学事課長が指摘した部分というのを基本として、じゃその中でいろいろな事

象、現象があるわけだから、それについてどう対応していくかということだという、そういう冊子であるということを御理解いただきますということですね。よろしいですか。

水崎委員　私はこれをつくっていただいていたうれしなと思いました。特別支援教育がスタートしてから何年かたちますけども、これは一歩進んだ取り組みだろうなと私は思っていますので、八王子の中でもこの特別支援教育、和田先生がおっしゃった意味も含めて、今海野課長も言っていた意味も含めて、どんどん子どもたちへの理解が広がって、それで支援も広がっていけばいいなって、その第一歩にまたなっていくんじゃないのかなと思いますので、私はこれをつくっていただいたことがすごくありがたいなと思いました。どうもありがとうございました。

小田原委員長　よろしいですか。それでは、特別支援教育ハンドブックについては以上ということで、このほかございませんか。

〔「なし」と呼ぶ者あり〕

小田原委員長　特にございません。委員の皆様で何かございませんか。

最近いじめについていろいろな報道があるわけなんですけど、特に群馬の場合いじめかなというところを感じるところですが、指導課として群馬の教育委員会、桐生市ですか、教育委員会の対応を見て、私どもとして考えなきゃいけない部分たくさんあるんですけど、指導課としての見解というか、所見があればお伺いしたいと思います。

佐島学校教育部指導担当部長　私どもも、新聞報道とかの報道の情報での判断になりますけれども、全体を通じて非常に感じるのは、学校も市教委も非常に危機感、いじめに対する認識が甘く、対応が遅い、後手後手になっているというように私も思っています。新聞の報道によると、5年生のときに母親から、いじめられているという訴えが学校に行っているというようなこともありますし、その時点で学校がどう対応して、市教委がどう把握をして、それに対する対応をしていたのかというようなところから考えると、当初、校長のほうが、いじめという認識はないという中で、担任が警察の任意の聴取の中でいじめがあったというようなことがなくて、学校との食い違いがあるというようなところから、結局、教育委員会として、報告をさせて、いじめがあったというふうに認定をしているという、本当に後手後手で、その教育委員会の言葉の中にも、家族が納得いかなければ、さらに慎重に調査を深める考えだと述べたというようなことがあって、家族が納得いかなければという問題じゃなくて、その問題が

起きた時点で確認する部分で、とことん調べて、対応をしていくことが必要じゃないのかという。こういうことは八王子にも起こり得ることですので、やはりさまざまなところから情報をとって、気になるところはしっかり足を運んで対応していかなくてはいけないというふうに感じています。

小田原委員長 後手後手というところでもいいのかな、これでわからないところもあるんですが。それで、八王子にも起こり得ることだということですが、どうです、八王子の中で、心配するような事態というようなことというのはないんでしょうか。

佐島学校教育部指導担当部長 報告を受けている中で、気になることについては、当然のことながら、学校で調査を、報告を上げていただいた上で、市教委のほうとしても調査をするような形になっています。きょうここで触れていいのかわかりませんが、第45号議案のこの点検評価の報告書の17ページのいじめの認知件数というようなことで出ているんですけども、20年度、21年度、これを単純に件数がふえたふえてないということではなく、やはり減ったからいいとかということではなくて、認識が高まったから報告件数がふえたということもあるかもしれないので、その辺の報告の精査というのをしっかりしていかなくてはいけないというふうに思います。現在の八王子市の中では、緊急性があるもので、突っ込んで調査をしていかなくてはいけないというふうに認識をしているものはありません。

小田原委員長 群馬の場合の見解として述べられたのは、後手後手ということだったんですけども、後手後手ということよりは、いじめとして報告が上がってきている場合は、我々としても対応できるわけですよ、すぐに。だが、そうでなかったからああなっちゃったかということでしょう。だから、そういうことは八王子でも起こり得るのかということなんです。いじめは起こり得る、それはいい。ああいう状況というのは八王子市にもあるのではないかという、そういう心配はないのかと。

佐島学校教育部指導担当部長 その部分は、正直に申し上げればあると思います。校長先生の意識の中で、起きたときに、きちっと教育委員会に報告をして、ともに対応していこうという姿勢の方もいらっしゃいますが、そういうことを、たくさんある学校の中で、黙っていればじゃないですけども、表に出さなければわからないだろうと、ここで抑えとけというような判断をされる方も少なからずいるのではないかと。私も実際学校を回ってみて、何と云うんですかね、後になって、あっ、こんなことが起きていたのかというようなことを聞いて驚くというようなことも、話を聞いてみると、

ああ、そういう状況だったのかということもありますので、じゃ、その辺は、学校からの報告を待つだけではなく、指導主事が学校をいろいろ回ってますので、その中でちょっとここは危ないということはよく指導課で話題になったりしますので、そういうところを切り口に、ちょっと見に行ったりとかもしていますので、そういうふうな話もいたします。

小田原委員長　　ということですね、いかがですか。

和田委員　　毎年国が行っている問題行動調査のいじめ発見の第一が、学校が行った調査、アンケートによって、正確な数字は忘れましたが、70%、80%が1位になっていて、2位が担任が発見するというような項目になっていたかと思うんですね。やはり調査に頼らざるを得ない部分があるんだけれども、じゃその調査が本当に適正に行われているかということについては、なかなか難しい部分もあるんだけれども、私の苦い経験の中で、例えばですよ、私も本当びっくりしちゃったんですけども、クラスのアンケートを実施したときに、欠席者がいる、あるいは学級のクラス定数に合っていないのにアンケートを終了してしまっている、つまり欠席をしたりとか、いない子の分を抜かしてしまっているというようなこと、それから担任がいじめがあるって書けない子どもたちがアンケート用紙の中に苦しんでいる姿が見えるんですよ。要するに、ある、なしって書く、真ん中に丸を書いてみたりとかね、その欄を無記入にしてたりする部分があるんです。その部分を担任の先生がきちっと読み取らないで、ああ、これこっちなって丸つけちゃったりとか、それで空欄になっているものは、回答なしと上がってきたりするんですね。

だから、そういうことを考えると、本当にもっと丁寧にやっていく、調査などもきちんと調査をしていくという部分が大事になってくるし、それから今回の事件もそうなんですけど、給食の時間に一人だけで食べているという現状があったときに、これ変だなと思わないで見過ごしてしまっているというような、担任レベルの問題も非常に多いのでね、やはり調査に頼らざるを得ない。教育委員会はまして上がってきた資料をもとにして指導に当たらなきゃいけない部分があるので、そういう調査についてもきちんと精査するような、そういう御指導を今後していかなくちゃいけないんじゃないかなというふうに思います。

今指導担当部長がおっしゃられたように、保護者がどう言ってきたからとか、納得しないからとかっていうことではなくて、やはり調査をきちんと行う学校の体制や校

長先生が意識を持たないと、そのまま調査がずっと流れてしまったりとか、聞くべきところを聞いてなかったりとかいうような、そういうところが出てくるわけですね。

ただ、一方で思いがあるのは、やっぱりいじめられている子の気持ちも非常に大事なんだけど、学校の中にいる加害者は在籍している児童なんですね。そのところの子どもたちもケアしていかなくちゃいけない部分もあって、その両者のあれもあるわけですけど、事実は事実としてまとめ、明確にしていく必要があるとすれば、調査や実態をどれだけ学校は日ごろから把握できるかってあたりは、ぜひまた機会があったときに御指導いただければなと思います。

水崎委員 いじめについてだけではなくて、ほかのことも含めて、例えば担任の先生がもう少しで学年変わるから、いじめであったり、いろんな面で先生が困っている、そういう子どもたちと手が切れるからとか、あとは卒業しちゃえばもう関係なくなるからとか、そういうような思いだけは持ってほしくないなっていう気持ちでいっぱいです。もちろん、八王子にそういう先生がいないということを私は信じたいと思うんですけども、保護者の中ではそういうような話も出るときもあるんですね。あと少しでも学年変わっちゃえば、あの先生、その子の担任を持たないんだからいいよねとか、あと卒業しちゃうんだから余り真剣に取り組んでくれないよねとか、そういう話を聞く場合も今まであったんですね。

だから、ぜひそういうようなことが八王子はないようにお願いしたいなあとと思うのと、あといじめ対策というのは、何年もかけて徹底的にやっていかないと、いいかげんな気持ちでやったら、かえってひどくなる。やはり、やり始めたら、取り組み始めたら、徹底的に本当にもう絶対ないというところまで取り組まないと、いじめについては直らない、よくなるというのはいっていますので、よろしくお願ひしたいと思います。

平塚学校教育部主幹 ちょっと前任の立場的な発言もあるんですけども、私も今回の件、教育委員さんと同様に思うのですけれども、一時的には、やっぱり学校で危機管理意識を持って、見つける、発見というのが肝要なんですけれども、非常に心配があるように、学校で気がつかないケースというのがやはり一番心配で、これは今回の群馬のケースは別に、新聞でちょっと目にしたところなんですけれども、今、子どもたちの間で、いじめをして学校の担任に見つかったらゲームオーバーというような、そういう感覚のいじめがあるというようなことがあるんです。非常に陰湿なんですけれ

ども、これはやっぱり十分あり得ることと考えなきゃいけない。なので、学校でやはり気づかないいじめというところの中で、本人がいじめだと。これに対して、学校以外に相談できる役割を、ここで逃げ道じゃないですけども、ここをやっぱりきちんと確立していくのが大事なことだと思っております。その辺のところも受けて、昨年度規則の中で、いじめがあれば、指定校変更、転校ができるよということで、規則改正をしたところもそういったところで、今、市のホームページで、いじめているニュースと、一応そここのところを確認をするようにということも、必ずしも転校がいいわけじゃないんですけども、どうしてもやはりそういうような、転校を視野に入れた相談とかになれば、やっぱりそういうふうなところが本人にわかるような仕組みをもうちょっと確立していく必要がある。その中で、小さな子どもたちに、いじめの、こういうリーフレットみたいなものを多分みんなに配っていると思いますけれども、そういうのがやはり周知をされる、学校以外に相談できるところを整備することが必要と思っているところです。

小田原委員長 幾つか出ました。

川上委員 今いじめが出てきてからのことのお話し合いなんですけど、きょう、まずここへ来て初め、一番最初にお話ししたのはそのことで、和田委員とそのことをお話し合いをしてたんですけども、いじめられた経験のある者として申し上げれば、私はいじめられているその瞬間に、どうしてこの人はこういうことをするのだろうか、そこをすごく考えてました。もちろん親にも先生にも言いませんでしたけれども、それが今となればそれがいじめだったんだというのはよくわかるんですけど、嫌なことをされて、それをどうしてこの人はするのかしらっていうふうにならなくてずっと思ってたんです。何が原因でそうしたくなるのか、するのか。先ほどのゲームオーバーっていうことがありましたけど、じゃなぜそれをするんですかね、そここのところが本当の教育なんではないかというふう思うんです、一番。なぜそれが、原因があるんですよ、心の動きという原因が、そこを一番最初に、それこそ学校でしたら小学校に入ったときにそれを少しずつ、本当に一つずつ、それこそ心の教育をしていかないといけないのではないかと。これ出てきたから、今あるところを探すとか、それから緊急性があるとかないとかって、どんなささいなことでも、周りから見ると緊急性があるかないかなんて判断できなくて、その当事者、本人じゃなければ緊急性なんてわからないというふう思うんです。そのことをやっぱり一番考えていかなければいけないし、実践して

いかなければいけないのではないかと。それが大人がどういうふうに行うことができるのかというところを考えていかなきゃいけないんじゃないかというふうに思っています。

小田原委員長　それぞれの立場から御指摘があったんですが、文科省が早速その調査をしるというような通達を出しているわけですが、そういう通達で調査をすればいいということではないんだということを皆さん御指摘されているというふうに思います。

指導担当部長のほうからも、指導主事が学校を訪問しているという中で、対応を迅速にしているんだという話もありましたけれども、前にもこれ私言ったかもしれませんが、学校を訪問したときに理科の実験をやっている、そこでどうもお二人の様子がおかしいなというふうにして声をかけたら、後から校長室に来て、私たちいじめられているんですというふうに訴えてきたケースがあるんですよ。指導主事がそういうところに行って何か変化があるのかないのかを見るということも必要なことだし、先ほどの調査の中でのサインを見落とさないということとか、いろいろありますよね。

川上委員の、何でいじめられるのか、あるいは何でいじめるのかというところを見つけていく、見つけるというか、考えさせるというんですかね、それはそれぞれの立場で、学校とか教員とか、それぞれのところすべてが考え、いつも意識していなければいけないことだろうというふうに思いますね。

平塚さんがお話ししたような、こういう場合にはどうするんだというような、その対応の仕方、行政としての対応の仕方というもの、これもぜひ用意しておかなければいけないし、それを周知させていかななくてはいけないだろうということですよ。

ぜひ八王子では、いじめはなくしてほしいし、それから、起こった場合にもそれに適切に対応するということはぜひ確かめつつ進んでいってほしいなというふうに思いますので、あえてこの機会に申し上げたわけです。

そのほか、委員の方で何かございませんか。よろしいですか。

〔「なし」と呼ぶ者あり〕

小田原委員長　じゃないようでございますので、ここで暫時休憩ということにいたします。なお、休憩後は非公開となりますので、傍聴の方は御退室願います。

再開は10時25分ということでよろしいですか。では、よろしく願いいたします。

【午前10時15分閉会】